
とあるもしもの一方通行

シ者 カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるもしもの一方通行

【Nコード】

N9339U

【作者名】

シ者 カヲル

【あらすじ】

「平行世界」。それはただの空想上の理論でしかない。しかし、それがもし、実在するとしたら、あなたはどっ思いますか？この物語は、「とある魔術の禁書目録」で登場する第二の主人公「一方通行」と、「平行世界」で活躍する 高宇昭一が送る『もしもの』世界である。

平行世界（前書き）

どうも！無名作者のwatsonです。僕の第二作品です。なかなか下手な文章力ですが温かい目で、どうか長い間、見守ってもらえると嬉しいです^^

平行世界

みなさんは、『パラレルワールド平行世界』という言葉はご存知だろうか？

簡単に言うと、俗にいう『運命』というものは、ある分岐点でいくつにも枝分かれしており、

自分の知らない『自分』が他の宇宙に存在するという馬鹿げた理論だ。

しかし、あなたはそれを、『ただの空想理論』と捉えてはいないだろうか？

え？何故そんなことを聞くのかって？

その『パラレルワールド平行世界』は実在するのだから。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

平行世界（後書き）

予告ですね。次回から本格的に内容に入っていきます。

一方通行のお願い。(前書き)

おねがいすw

一方通行のお願い。

よ才。
俺は一方通行。
アクセラレータ

学園都市最強のレベル5だ。
超能力者

説明しておく。

学園都市という言葉自体分からねえ奴に一通り

を占める

学園都市ツツウのは東京都の面積の約三分の一

巨大な『開発機関』のことだ。

新しいグルメや、新しい物理法則、科学兵器などなど開発している『都市』のわけだがア、

特に力を入れているのは『超能力』の開発だ。

この都市の人口は役230万人。

その中のほとんどが、『なんらかの能力』を持つ
っつうっつ

その『能力』に力差を付けてるわけだ。
レベル

まずは、無能力者^{レベル0}。能力を持っていないか、または計測不可能の極々小さい力の持ち主。

次に、低能力者^{レベル1}。スプーンを曲げる程度など、日常生活ではあまり役に立たない力の持ち主。

次に、異能力者^{レベル2}。低能力者^{レベル1}とあまり差がない力の持ち主。

次に、強能力者^{レベル3}。火をおこしたり、弱い電気を発生させるなど、日常生活において役に立つの感じられる能力の持ち主。

次は、大能力者^{レベル4}。軍隊において戦術的価値を得られる程の力の持ち主。

最後に、超能力者^{レベル5}。単独で、軍隊と渡り合える力を持つ持ち主。学園都市にたった7人しかいない貴重な存在。

とまあ、こんな感じだ。

ちなみに俺は学園都市第1位。能力は『ベクトル制御』。『力

を持つもの』なら種別を問わず、力の方向性を操るってワケだ。

これを踏まえてこのお話に目を通してもらいたい。

もっと詳しく知りたい奴は、ウィキペディアを参照にしろ。(し
てください)

もしも一方通行が女好きだったら。(前書き)

『もしもシリーズ』第一弾です！

もしも一方通行が女好きだったら。

アクセラレータ
一方通行。

なにかと、ツンデレやらロリコンやらと弄り倒されている人物だが、

もう一つ、『女好き』というテーマが入ったら？どうなるんではないか。

では、一部始終を見ていきましょう。

とある口。

一人の少年は、ある研究員に声をかけられた。

『君は、『絶対能力者』^{レベル6}に興味はないかね？』

研究員は言う。

『簡単な実験プログラムを行うだけで、君は世界に一人の『無敵』の存在になれる。神に最も近い人間にね……………」

少年は応えた。

『上等じゃねエか』

数週間後、少年は研究施設にやってきた。中に入ると、結構広い空間がぼつりとあるだけだった。

『まずは「一体目」だ。長い道のりだが、これを乗り越えれば「無敵」になれるよ。』

研究員は笑う。それは人の目ではなかった。人を見る目ではなかった。

少年はステージの真ん中に目をやる。そこには。

少女がいた。なんの変哲も無い少女。

暗視ゴーグルと、小型ライフルを装備しているところを除けば。

『まずは一回目だ。極普通に戦闘を行なってくれたまえ。容赦も手加減もいらぬ。そんなことをしたら、あの「クローン」に君が殺される。』

すると少年は目を丸くして質問する。

『どおいう事だ？それ。』

「研究員も同じく目を丸くし、

『え？いや。あの「クローン」を殺せばいい。たったそれだけだ。

『え、いやいや殺せませんって。』

『はいいい？』

何故だ！と研究員が怒鳴り散らすと、少年は答えた。

『俺、女の子好きなんです。熟女も好きなんだよ。』

シーン……と、ステージに静寂が広がる。

『クローン』の少女も、目を点にしてこちらの様子を伺っている。

『じゃあ今回の実験はどうなるんだ!』

『知らねエよ。馬鹿。自分で解決しろクソ研究员さんよ。』

少年はツカツカと歩み、その場を後にした。

彼の名前は、アクセラレータ一方通行。

とある世界の『女好き』である。

t o b e c o n t i n u e d

もしも一方通行が女好きだったら。(後書き)

いかがでしたか？いやいや一話完結ではありません。もう少し(と
いうかかなり)続きます。

得た光（前書き）

キャラ崩壊注意。 W W W W W W

得た光

「まったく表紙抜けだぜチクシヨオ・・・」

ある出来事が起こったのはつい先週のことだ。

学園都市に存在する超能力者^{レベル5}は7人。

そのうちの第3位に位置する人物クローンを二万^{レベル6}体殺害すれば、絶対能力者に昇華できるというものだった。

……が、しかし。

よりによって、その人物は「女」だった。

よりによってこの^{アクセラレータ}一方通行に。

それから彼は悩んでいた。それは『やっぱりあの実験を受けてい
ればよかった』

なんて話ではない。

時は6日前に遡る。

その後、即帰宅した一方通行は^{アクセラレータ}大変健やかに眠りについた。

彼の能力は「力の向き変換」^{ベクトル}

あらゆる力の向きを操作できる悪魔のような力だ。

今、眠っている彼をぶち殺せる人物などいないだろう。

今、彼はあらゆる力を「反射」する膜のようなものを体表面に展開しており、

この状態ならば、頭に銃弾を打ち込まれようが、目の玉にナイフを振りかざされようが、

腹に核爆弾を抱えて自爆しようが、上空から直径1kmの物体を落とされようがなんだろうが

傷一つ付かない状態である。

よって、完全無敵の眠りにについているハズだが、

驚愕の目覚め。

「……っ?」

目を開けると同時に、人の気配。自分以外誰もいないはずなのに
気配を察知する。

そこで、ふと横に目をやると、

「やっと起きたんだね?」アクセラレータ一方通行。と、ミサカは笑顔をつくりつ
つあなたに急接近してみます」

少女がいた。

茶色く、短い短髪に、額には暗視ゴーグルが付けられた少女。

昨日の実験体だった。

・・・なんなんだ？

否。普通の^{アクセラレータ}一方通行ならここでミンチにしているところだが、この小説の設定を思い出して欲しい。

女好き。ハッキリいってこんなところに少女が突然現れて喜ばない奴一方通行ではない。

だが、

「なんだテメエは？」

あくまでツンを装う。内心ときめいていた。

「私の名前は検体番号^{シリアルナンバー}00001号。ミサカ一号と読んでね!と、ミサカは間髪いれずに自己紹介してみます」

なんだこの変わった口調。明るい口調かと思えばあとから冷静な言葉がくつついてくる。

「……………つかなんでここにいたって普通にいるワケ?」

すると少女は体をもじもじさせながら、

「そんなこと……昨日のこと忘れられなくて、気になったからって言うしかないかもね。と、ミサカは赤面しつつも、この質問に最も適した発言を試みます」

「……………あ?」

まだ寝ぼけているのかまだ状況を把握できていない。

なんなんだ。朝っぱらから告白なんて今までではじめてだぞ。

「……………あ!そんな意味じゃないよ!何考えてんだよこのロリコン!と、ミサカは冷静に誤解を解きつつ、相手の意表を付いてみま
す」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いくら女好きでも「ロリコン」は効いたらしく、目が下に落ちる
アクセラレータ
一方通行。

しかし、そんなことでもめげずにナンパしてみるアクセラレータ一方通行。

「オマエ、俺の事好きだろ」

至高のどや顔。

「え？」

「そつだろオ？」

「うえ？」

「だから付いてきたんだろ？言ってみろやアあ！」

「違うよ！決してあのとき残酷な実験からどうでもいい命を助けてくれたあなたのことが気になって仕方ないなんてそんなこと思っ
てないよ！と、ミサカはいたって冷静な発言に酔いしれてみます」

言ってることと思ってることのギャップが正反対なのだが気にしないことにした。

ここでふと思いついたように、

「オマエ……………」

目を細めて少女を見つめる。

「な……………」

戸惑う少女。それを見て一方通行は、

「貧乳」

終始無言。その後、2時間にも及ぶ少女の口論に悩まされた一方通行であった。

お付き合い

そんなワケでかれこれ一週間……………。

あの少女は何処からともなくやってきて、突然話しかけられる始末だ。

簡単に言いつつ、付き合い合っているような状態だ。

(あんどき攻めてなかったらこんな面倒くさいことには・・・悪い癖だチクシヨオ)

本人は面倒くさがっているようだが。

「ねえ！一方通行。アクセラレータ聞いている？と、ミサカは上の空のあなたに質問します」

「ん・・・ああ・・・」

さすがにここまでいくと違う意味で呆れてしまつ。

「もぉ。やっぱり聞いてなかったのね？」

一号は頬を膨らませる。

「昨日、違う女と話してたでしょ？知ってるのよ。浮気とか絶対許さないんだから。」と、ミサカは逆上しつつも、浮気疑惑の核心にせまります。

「いいじゃねエかよ別に。俺の性格知っての上でお付き合ってるんだろ？なんなら別れてもいいんだぜ」

「う・・・それは・・・」

一号はうつむいたまま喋らなくなってしまった。

「オなるとこオなったで気まずいんだよなア・・・」

「ここでなんとか話題を変えることを思いついた。」

「そオいえばよ。あの実験はどうなったんだ」

「一号は話題が出来たことが嬉しかったのか、さっそく質問に答えた。」

「あの実験なら・・・」

と、ここで言葉が詰まった。表情もどこか暗くなっているような気がする。

「あん？」

「あ……うん。あの実験ならあの後に樹形図ツリーダイアグラムの設計者の再演算を行なったけど、一方通行アクセラレータ以外の成功可能者はいなかったんだって。だから実験は中止。超電磁砲レールガンの軍用モデル2万體は解放されたの。と、ミサカは実験データをもとに説明します」

「レールガン？第三位のことか？そういえばソックリだな。」

「ああそうか。よかったな」

今の自分が発した言葉に一方通行アクセラレータは驚く。

前まで闇に身を浸していた人間が言うようなセリフではない。そもそも、いつからだろうか。こんな平和な世界を味わい始めたのは。

気づくともう日が暮れていた。

「一号。もう帰るわ。」

「うん。じゃあね。と、ミサカは応えます」

「一号オ」

うん？と一号は振り向く。

「浮気なんかして悪かったな」

そんなしょうもない言葉でも、何故か喜んで返答したあと一号は走り去った。

(ほんと。なんなんだよアイツ)

事件

一号と、別れて帰宅した翌朝、
一方アクセラレータ通行はどこか落ち着かなかつた。

(気になるな・・・昨日のアイツの様子・・・)
(

連絡を入れようにも携帯などもっていないと言っていたし、どうしたらいいかわからなかったが、

「足を使えってことかよ」

うなだれる一方通行^{アクセラレータ}。基本的に動くことは好きじゃない一方通行^{アクセラレータ}が人探しのために重い腰をあげることなど世界の七不思議に値することだ。

それから数時間、日が暮れるまで学園都市中を歩き回ったが、結局得たものは周りからの冷たい視線だけだった。

闇に関係したもののだけが味わえる一生の重荷^{烙印}。どうかあがこうが、どうか心を浄化しようが、取れることのない悲しい烙印^{烙印}。

「チツ。何処行きやがったんだあのアマア」

それから一ヶ月、いくら探したところで一号が出てくることはなかった。

それでも彼が諦めなかったのは、ようやく得た『光』を、どんな形であれ、ようやく孤独から引きずり出してくれた彼女をどうしても連れ戻したかったのだろう。

彼は彼女と出会ってから迷惑だなんて思ったことはない。最初はいつもの癖でやっちまったとか思っていたが、いずれかはそんなのは抜きで彼女にすがっていたのかもしれない。

あつという間の一週間。途中、浮気なんてしたのも、彼女から離れたくなかったただけなのかもしれない。

夕暮れ時、彼は上の空になりながらも街中を探し回っていたころ。

いたのだ。茶色く短髪の髪に、暗視ゴーグルを装備した例の彼女が。

一方通行は駆け寄り、迷いなく言葉を発した。

「おいコラくそ女ア！一体どこをほつつき歩いてやがったア！！この俺がどれだけクロウしたか分かってンですかアあ！？」

その後返ってきた返事は、以外にも彼の心を串刺しするような冷たい声だった。

「あなたが学園都市第1位の一方通行ですね。と、ミサカは相手の罵声にも耳をむけず一方的に質問します」

あ？と彼は硬直する。

違うぞ。こいつは一号じゃ……。

「その様子だとこちらの推測は正しかったようですね。と、ミサカは確証を得ます」

「……………テメエは誰だ」

「シリアルナンバー 検体番号 09821番。ミサカ09821号です。と、ミサカは自己紹介します」

(きゅう……せん……はっ……ぴゃ……く)

思考が空回りする。

(そういえば、第3位の軍用モデルが2万体现在とかなんとか……)

めでよ、と。あることに気づく。

「1号はどいつにいたる？」

核心に触れる一言に対し、返ってきた言葉は冷静に、残酷な事実をつきつける。

「ミサカ00001号は1ヶ月程前に死亡しました。と、ミサカは質問に応答します」

は？

笑うしかなかった。

「冗談だろ？愉快的な冗談かましてンじゃねえぞ」

「冗談ではありません。事実です。と、ミサカは間髪いれずに否定します」

「おいデメエ！！笑えねエツって言うてンだ……」

「一号からは聞かされていなかったのですか？」

謎の言葉。他の言語にしか聞こえなかった。

「一号があなたの自宅に訪問した際、もう一度『実験』を受ける気はないか？と聞かせていなかったのですか？と、ミサカは再度質問します」

「ナニ言ってるの？オマエ」

ふう、と。09821号は哀れみを込めた声で話を続ける。

「一ヶ月前、いや、正確にいうと一ヶ月飛んで4日前、ツリーダイ樹形図のプログラム設計者の再演算に基づいた『実験』が再開されたのです。と、ミサカは丁寧に説明して差し上げます」

「ナニ言ってるやがる。ツリーダイ樹形図の設計者の再演算は失敗したんじゃないのか」

「再演算した結果、第1位のアクセラレータ一方通行の他に、レベル6絶対能力者にソフト進化できる人物が、第6位のたかう高宇 しよついち昭一と判明したため、実験は再度実行されました」

同じで09821号は、はっと我に帰り、

「少し喋りすぎましたね」と、ミサカは自分の過ちに激怒します

高宇……………昭一……………
。

「あなたのことは一号からの信号によりある程度知っていましたが、まさかこんな……………」

その後の言葉なんぞ聞いていない。

こみ上げてくるのは、高宇への殺意のみ。

アクセラレータ
一方通行は、再び闇の世界へと身を浸すしか他なかった。

事件（後書き）

ちよつとベタすぎましたかね？すみません><

対峙

今日は月明かりが眩しい。

「……く……じ……!……く……」

月明かりの下、少女は逃げ回っていた。

耳からは出血し、体のところどころに重度の火傷の痕があり、それでも尚、彼女は逃げていた。

そして、綺麗な夜空とは似合わない、闇に塗りつぶされた一筋の
声。

「あは。待ってよお。逃げても無駄だよ？世界ってのは狭いんだ

「からな！あはははは！！」

嘲笑。狂気に満ちた声は、輝く月さえも覆うかねない。

青年だった。身長は平均的な高校生の身長となんら変わりはなく、髪型は左眼を隠す形の長い前髪に、ビジュアル系バンドを思い浮かべせるようなストレートパーマだ。

ここはスクラップ置き場。廃車や使われなくなった電化製品。さらには廃車両までもが無造作に投げ込まれていた。

上空から見ると、あまりの廃品の量でまるで玩具おもちゃの迷路のように見える。

「ハアッ！ハアッ！ハアッ！」

重い足を引きずり、必死に逃げる少女を裏目に、黒い青年は笑う。

「はは。無理するなよ。早死するだけだぞう？楽に死んでくれよ。頼むから。つてか聞こえてねえか」

パン！と、少年は軽く手を叩く。

だが。

前で逃げる少女のふくらはぎから、ジュウ！という肉が焦げる音が鳴り響く。

「……っ！」

あまりの苦痛に、ついに少女は足をつまづき無様に地面に倒れた。

ザッザッザッ。

その足音は次第に大きくなってゆく。

ザリ！ザリ！ザリ！ザリ！

彼女は鼓膜が破裂し、ろくに音が聞こえないが頭の中のイメージには、あの青年。

振り向くと、嘲笑う悪魔がそこにいた。

青年はうつ伏せに倒れている彼女の耳元でこう囁く。

「また楽しませてくれよ。出来損ないの乱造品」

彼女に手が振りかざされようとした時、背後に気配を感じた。

「なあ」

突然の質問に、彼女は戸惑う。

「どういう場合って、実験ってどうなっちゃったのよ？」

青年の後ろには、一人の白い少年。

「おい、その悪趣味野郎ちゃんよ？」
シユールボーイ

「……………誰？君」

戦慄する空間。二人の間にはこの世のものとは思えない程の殺気が入り交じっていた。

白い少年は言う。

「キレイな死体オブリエの造り方って知ってつかア？」

衝突

「キレイな死体オツジエの造り方って知ってたかア？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふい」

「ンだア？そんなに笑いたいんなら、愉快で素敵な泥人形にしてやるオカア？」

「そうかそうか……アクセラレータ一方通行か……」

コクコクとうなずきながら納得する素振りを見せる高宇。

その後、緩む口元をゆっくると開き話し始めた。

「君も知ってると思うけどさ。俺がこうやってんのも初めてじゃないのよ」

そう言つと、うつ伏せに倒れている少女を指差して話を続けた。

「こいつ。ミサカ……何号だっけか？あはは。何回殺したかわからないくらいぶっ殺してるのにさ、あとからあとからワンサカワンサカ……。ホント、人形遊びって楽しいよね」

くすくすと口元を抑えながら笑う黒い青年を見て、アクセラレータ一方通行は、

「つまんねエ。オマエがこんなつまんねエ事をやってる理由ってのはなんなんだよ？もしかして、『レベル。無敵』とかそんな存在を目指し

ちやったりしてるワケ？笑えるよなア」

「チツ……。もうちょっと話を通じる奴かと思ってたけどさ。
面白くないなア。第一位」

高宇はそこら辺の小石を蹴飛ばしながら話始める。

「なんでお前さ、この実験受けなかったの？」

「……………」

「てか知ってるぜ。その理由。実験うけないかって聞かれたとき、『女好きだから無理』とかナントカ言っただって？くくくく。以外と純粹なのね君」

「それがオマエの遺言ってことでいいんだな？」

「一つ気になることがあったんだよ」

黒い青年は、手品のタネをバラすかのような口調で、

「一番最初。この実験の実験台第1号の奴がさ、死に際に小声で君の名前を言ってたんだけどさ、もしかして知り合いだった？ゴメゴメ。つい楽しくなっちゃってさ、その人形の首け」

言い終わる前に、アクセラレータ一方通行は一瞬にして高宇の左真横に立つ。

刹那、アクセラレータ一方通行の左手の裏拳が高宇の脇腹に食い込んだ。

バキバキメリ！と。音を上げながら高宇の肋おほむねが悲鳴を上げる。

「……………つぐ……………が……………」

声を上げる暇もなく、ベクトル制御された彼の一撃により高宇の体は地面を離れ、20メートル程横にふつとばされた。

地面に落下した後、ゴロゴロと転がりながらようやく高宇は停止する。

その間に、アクセラレータ一方通行は倒れている少女の元に駆け寄る。

「おいっ！おい！目エ覚せクソツたれ」

ペチペチと少女の頬をひっぱたくと、少女は虚うつな目を見開いた。

「あ……あなたは……」

少女は、今さっき出会った09821号だった。

「さっさと逃げる！死にたくなかったらな！」

「……どうして？」

は？とアクセラレータ一方通行は首を傾げる。

「こんなボタン一つで大量生産できる人形を、何故あなたはこ
う
や」

「黙れ。この俺に殺されてエのか」

言えるハズがなかった。

このミサカ達は、一人の人間から生まれたクローンだ。

1万人いようと、5万人いようと、すべて同じ形質を示し、容姿
性格の差なんて微々たるものだ。

それでも。

今倒れているクローンが、いくら同じ形質を持っていると聞かさ

れようが、

一号にしか見えない。あの明るい一号が、そこにいるように思えて仕方がない。

「・・・・・・・・・・はやく」

ビクン、と肩を震わせる09821号。

「さつさとこの場から消えるクソ野郎オオがア！」

09821号は終始一方通行を見つめたあと、足を引きずりながらスクラップ置き場から立ち去っていった。

完全に姿が見えなくなったのを確認したあと、後ろを振り返る。

そこには、孵化寸前の黒い悪魔がいた。

「やってくれるじゃないの第一位」

それでも尚、ニヤニヤとわらっている高宇を見て一方通行は鳥肌アクセラレータが立つ。

「生きてるだけでもマシだと思えよクズ野郎」

「余裕だね。俺の力を知ってるのか？」

くすくす、と笑い終わったと、高宇はもう一度一方通行アクセラレータを睨み、

「君なんか俺に勝てると思ってるのか？」

口調が変わる。

そして地面に赤い液体がポトリと落ちる。

血だ。

決して傷一つ付かないハズの彼の体から血が流れている。

手のひらで耳を抑え、それを見る。

(血……だと……)

はっ！と顔を上げる。

そこには口を裂けるほど開けてわらっている悪魔がいた。

「 たろ？ メエじゃ は よ
「よ」

何かを言っている。しかし、鼓膜が潰れていて何を言っているか聞き取れない。

(クソっ……たれがア!!!)

アクセラレータ
一方通行は、ベクトルを操作し、その場から飛び起きる。

(とりあえず。死体決定だクソ野郎！！)

五本の指をめいっぴい開き、高宇の顔面へと迫る。

触れれば相手の生体電気や血流を反転させ即死させることができる殺戮の手。

「あ　い。　　楽し　ろよ　位」

その手はなんなくかわされ、高宇は後方へバックジャンプする。

「怖　　。　　手。触れ　　間死ん　　だろ？」

また何かを言った後、高宇は一方通行の鳩尾みぞおちを狙ってアッパーをしってくる。

（バカかコイツ。俺の能力を知らないのか？）

あえて構えず、余裕の笑みを浮かべてみせる。

だが。よりによってその手は彼の鳩尾に突き刺さった。

(ン・・・だとオ・・・)

崩れ落ちる第一位。それをあざ笑う黒い青年。

「ここでみじやく言葉を拾うことができた。

「また出直してこい。第一位」

クソツ
・
・
・
・
・
・
・
たれ
・
・
・
が
・
・
・
・
・
・

格差

アクセラレータ
一方通行は、薄れる意識の中遠ざかっていく高宇を睨む。

(. 09821号)

高宇だ向かっている方向は、先ほど09821号が逃げた方角だ。

(ちらせるかよ これ以上)

地面にうつ伏せのまま、手元の砂利を掴む。

「待てよ
」

呼んでも、高宇は振り向かない。

「待てつつつてんだろオ！クソ野郎オオおお！！」

ささやかな風が吹いた瞬間、大気の流れを制御する。

彼の能力は『ベクトル変換』。力を持つものならば、例外なくその方向性を操れるというもの。

それが風、つまり大気の流れであっても例外ではない。

ゴオオオ！！と、轟音を立てて風が集約する。

殺せ、と一方通行は叫ぶ。
アクセラレータ

風速120メートル。
マグニチュード M7クラスの局地的な嵐が高宇を襲つ。

は・ず・だ・つ・た。

高宇は肩越しにニヤリと笑うと、何をしたのかその風を真上に方向を変えた。

「なっ・・・・・・・・」

必殺の一撃が、いとも簡単にはじかれる。

「甘アクセラレータ。一方通行」

高宇は一方通行アクセラレータの方に振り向く。

「君は、俺同然なん から」

「何を言って……」

ギクリ、と。彼はさっきの高宇の口調を思い出す。

そして見覚えのある演算パターンは……

アクセラレータ
一方通行は忌々しく舌打ちするよ、

「『暗闇の五月計画』か」

「正解」

暗闇の五月計画。

学園都市最強の超能力者^{レベル5}の演算パターン一部を、他社の脳に移植
することです、

人格の崩壊と引き換えに、その能力者の演算能力を分け与えるとい

う・人・体・実・験。

「テメエも闇の人間か」

「君程じゃないよ」

「だったらここで解放してやる」

「・・・」

「闇に落ちるのはお互いだけで十分だ」

言い放ったあと、立ち上がりながら思考する。

考える。奴の能力を。奴の弱点は何だ。

あの演算パターンは、俺の『制御』に関する演算パターンだ。

つまり……

「ほっぴー！」

高宇は一方通行アクセラレータの顔面へと回し蹴りを繰り返す。

一方通行は、蹴りに掛かる運動エネルギーをすべて相手に向ける。

だが。

視界が一瞬揺らぎ、呼吸が止まる。

その瞬間、バギィ！と、高宇の回し蹴りが彼の顔面へ突き刺さった。

(チクシヨ……………なんで……………)

またも直撃。

一方通行は地面に倒れ込む。

「ぐう……………」

「ほら。そろそろ死ぬか？」

高宇は両腕を広げる。これで手を鳴らせば、アクセラレータ一方通行のどこかが
血を流すことになる。

考える……………

俺が反射出来ない理由はなんだ……………

俺が……………反射していないもの……………

「死ぬ 第一位イイ
いいい！」

バチイ！と、無残にも手が叩かれる。

なんらかの力で、アケセラレータ一方通行の体は血を吹くことだろう。

しかし、

あるところか、高宇の耳から鮮血が吹き出した。

正体

「うわあああああああああああああああああああ……！」

自分が放った攻撃を反射され、出血している耳を抑え地面でもがき苦しむ高宇。

「ようやく分かったぜ。テメエの能力がな」

「ぐウ……何故……いつ……」

「おまえの攻撃にすべてヒントが隠されていた」

アクセラレータ
一方通行はパン！と軽く手を叩く。

「この音だろ？オマエの力の正体は」

「……！！」

「正確には空気の振動数ってトコか」

ふう、と一方通行はアクセラレータ大きなため息をひとつ付く。

「誤算だったな悪趣味野郎。一番最初のシールド一撃、耳なんぞ狙わなかったらこんな事にはならなかったろうに」

高宇は耳を抑えながら、地べたの上でアクセラレータ一方通行を睨む。

「俺が反射していないものはタダ一つ。『音』だ。『音』を聞こ
うとすると無意識の内に空気の振動の反射を止めちまう。テメエが
耳を狙ったのは『なんとか音を拾わせる』ための作戦だったってワ
ケかもしれないエが・・・」

「・・・・・・・・ひひ」

「・・・・・・・・」

「楽しいイイイねエ！！^{アクセラレータ}一方通行アアああ！！！！」

狂気が周りに拡散してゆく。瞳孔は見開き、上下左右に裂けるほど大きく口を開けて爆笑する高宇。

10秒程たつぷりと笑ったあと唐突に静かになる。

「さすが第一位だよ。他人から能力性をここまで分析されたのは君だけだよ。
僕の能力は『^{フリックエンサー}周波変調』。君が言ったとおり空気の振動数を約最大まで高めて相手の鼓膜にぶつけることで相手の聴覚を壊すことだってできるんだが」

高宇は自分の頭を指さして、

「まだ声が聞こえてるレベルに抑えてるってことは承知してくれ

るかなア？」

「・・・・・・・・・・」

事実、^{アクセラレータ}一方通行はさっきよりは聴覚が生き返ってきている。

「でもびっくりしたよ。自分の技の威力ってすごいよね。でも瞬発的に振動数を変化させちゃったから、本当だったら耳どころじゃなかったかもな」

無邪気に笑うが、心底気味の悪い笑い方だ。

「只じゃ済まさねエぞ第一位」

「こっちも借りばかり作っちゃったんだ。きっちりリボンを付けて返してやる」

本音

「それで終わりかよお？第一位！！」

再び高宇の上段回し蹴りが、一方通行の顔面へと放たれる。
アクセラレータ

（こいつの能力でどうやってんのかは知らねエが、俺の『反射』
が死んでる以上、こいつの体術には勝てねエ）

咄嗟の判断だった。

瞬発的に身をかがめ、かろうじて回し蹴りをかわす。

ブン！と空を裂く音があたりに広がった。

アクセラレータ
一方通行と高宇の大きな違いはここだ。

身体能力の差。

今の今まで能力に頼りきっていたアクセラレータ一方通行に対し、

自分の能力を最大限に引き出すために体術・動体視力・反射神経を鍛えてきた高宇に、到底アクセラレータ一方通行がついていけないはずもない。

だが、

「第一位と第六位。どっちの能力が勝っているのか、実践しねエと分からねエレベルのバカなのか？」

「図に乗ってんじゃねエぞ最強。『暗闇の五月計画』で俺たちの人生は大きく道を外れた。俺たち実験体全員がオマエを憎んでんだよ。そこでこの実験だ。最高だね。俺はわかってたよ。オマエが必ずここに来るってことはな。てか、オマエに会ったら一回言っつてやるっつて思ってたことがあるんだけどよ」

高宇は口の端を歪ませ、暴走寸前の悪魔のような表情で一方通行に告げる。

「俺たちの人生を返してくれないかな？ 一方通行」

アクセラレータ
一方通行の表情が凍りつく。

闇の烙印。決して外れる事のない負の遺産^{フレイト}。

今まで俺がはどれだけの人を巻きこんできただろうか。

決して加害者ではなかったのに。いつから悪の道を行んでき
のだからだろうか。

同じだ。

同じ闇の人間が言えることではないかもしれない。それでも、

「バツカじゃねエの？」

冷たい、氷のような口調に、夜空が恐怖した。

決戦

「バツカじゃねエの？」

「なんだと」

大気が震える。二人の間に見えない巨大な壁が出来た。

「そんなくだらねエ事で妹達を殺してきたってのか？笑えねエ理由だよなア高宇くん？」

「君も闇の人間なら分かるだろう？俺と同じ烙印が張り付けられてるってコトぐらい」

「」つ言っておくが、」

遮るよじりた言ひ。

「テメエ達の心境なンぞどオでもいいンだよボケが。恨む？復讐？知るかよそんなこと。テメエ達は他の奴たちシステムズに手を出してる時点で終わってンだよ馬鹿が」

「……言ってくれるじゃないの第一位。やっぱりテメエは悪党だ。俺たちと同じ……いや、それどころか遙かに上を行く悪党だ」

高宇の目が濁る。深く、狂気に満ちた色に。

「だったら楽にしてやる」

悪党としての、闇の人間としての最も適切な言葉を彼は放つ。

「オマエの烙印レットル……邪魔な荷物幻想は全部ぶつ殺してやる。それで終わってくれるなら、俺は容赦をしない」

「ぶツツツツ殺してやるウウウウウつつつつ！——方通行アクセラレータ
アアアアアああああああアアアアアああああアアア！！！！

「！」

絶叫した。高宇は周りに転がっていた直径1メートル金属破片のガラクタを思い切り蹴飛ばした。

破片に掛かった振動数は高宇によって強制的に変更され、人の目には見えない程の高速振動を始める。

あまりの振動数に周りの空気中の原子同士が擦れ合い、摂氏800度の摩擦熱が発生する。

灼熱のガラクタと、溶けた空気が一方通行を襲う。

摂氏1000度近くに温度が上がっている酸素を吸い込むと、一瞬にして肺胞を焼き付くし、器官全体を溶かすハメになる。

よって一方通行は、アクセラレータ空気の反射を余義なくされる。

彼の肺活量から考えると、

タイムリミット時間制限は50秒。

幸運にも高宇とは距離があつた。アクセラレータ一方通行は金属破片の衝突寸前まで、息を吸い込み、空気の反射を開始する。

刹那、蒸発寸前の金属の破片が、彼の体に触れた瞬間粉々になり弾け飛んだ。

同時に、破片を蹴り飛ばした瞬間に彼に接近していた高宇が、手で空気を握るかのような形で指を曲げ、一方通行に勢いよく振り下ろす。

ギィィィン！という、金属同士が擦れ合うような音が辺りに散らばる。

続きは次回ですわ。

決戦（補足）（前書き）

ある都合で読みがな無しです。>< ;

決戦（補足）

一方通行の頭上で、空気が炸裂する。

たった今、高宇が握っているのは「空気」である。

ただし、我々が常にふれている無害なものではない。

彼によって「空気」に含まれるすべての分子の振動数は、目には見えないほどの高速振動をしている。

これにより発生した摩擦熱で、対象物を分子レベルにまで分離、溶解し、切断する。

つまり、触れたものを硬度に関係なく真つ二つにできる天然鋸である。

（ちっ・・・厄介なモンを・・・）

一方通行は、その場を離れるべく足元を強く踏みつける。

同時に運動量のベクトルを操作し、5メートル程後方へ飛ぶ。

その瞬間、さっきまで一方通行が立っていた地面が、縦・深さ共

に2メートル程の大きな溝を作り、遅れてジュウ！！という、熱した鉄板に水をかけたような水っぱい音を発した。

凄惨

何も無い時間が二人の間に生まれた。

ポツリ、と。空からは雨が降り始めていた。

小さな雨粒が一方通行の頭に落ちる。

が、それさえも許されずに雨粒は頭に触れる前に碎け四方に散る。

それを合図に、ザアアと大雨が両者を包んだ。

「皮肉なもんだ」

一方通行は空を見上げる。

「ほんとう………なあ」

「何を言っ^てやがる？」

「終わりにしないか？このままだとお前が死ぬ」

「はは。最後までムカツクやつだなオマエ。俺が死ぬ？聞き間違え」

「今なら」

「^{アクセラレータ}一方通行は遮るように、静かに告げる。

「今なら、間に合う。これを逃すと一生『闇』からは抜け出せなくなるかもしれない」

「知ったような口を聞くなア。俺はオマエを殺すために体術を磨き、この実験受け復讐を夢みてきたんだ。ここでやめたら死んでも死にきれねえ」

「黙れ」

っ！と、高宇は目を見開く。

「確かにオマエに同情して、今オマエに殺されることなソぞワケねえよ。だがなア」

アクセラレータ
一方通行は目を見開き、

「今のオマエも、今の俺と同じ立場だっことをオオ！分かって
んのかよオオオー！」

高宇はグギリ、と。強く拳を握り、

「なんにも分かってねエ……………分かってねエだろ……………
オマエは……………」

もつと強く、強く、強く、強く強く。

強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く
強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く
強く強く。

結末に能力なんていらぬ。言葉もいらぬ。

お互いの拳が交差する。

グシャリと、高宇の顔面にアクセラレータ一方通行の拳が食い込んだ。

(ち・・・・・・・・くじょ・・・・・・・・)

バシャア!とぬかるむ地面に高宇は倒れ込んだ。

そこから高宇が立ち上がる事はなかった。

決着は。決める者など誰もいない。

「俺も負けられねえんだよ。」

「光」が欲しいんだ」

凄惨（後書き）

なんか詰め込みすぎて無理やりだったかも><

高宇 昭一

だから人が嫌いなんだ。

これが彼の口癖だった。

彼は親がない。

いや、親は生まれて間もない彼を、道端に捨てた。

実質、彼は『親』という存在自体知らない。

だが、一人の男との出会いが彼の人生を大きく変えた。

高宇 総史郎

男の名だ。

彼は男にすぎた。唯一頼れるのは男だけだから。

学校でいじめを受けても、男が必ず助けてくれた。

いつも男と遊んだ。暇さえあれば男と出かけた。

いつも男と分かち合った。

いつも男と笑いあった。

いつしか彼は男をこう呼んだ。

父さん。

父さん、父さん、と。

彼が15のとき、男がこう言った。

なあ、「超能力」って知ってるか？

男はわらっていた。わらっていた。ワラっていた。ワラっていた。ワラッテイタ。

彼はわらっている男が好きだった。だから男にこういった。

教えてよ。「超能力」。俺知りたいな。

また男はワラッテイタ。アハハと。ワラッテイタ。アハハト。

じゃあ付いてきな。昭一。

彼は喜んでついて行った。あの笑顔が欲しいから。

でも。

地獄だった。周りには年も変わらぬ子供達。泣きじゃくる子。目を開けて気を失っている子。

最終的には、

ゴロのよつに、血が溜まった捨てばに放り込まれている子。

昭一。

呼ばれる声がある。振り向くと。

また笑っていた。父さんがワラッテイタ。ワラッテイタ父さんが
ワラッテイタトウサンガワラッテイタトウサントウサントウサント
ウサントウサントウサントウサントウサントウサン

「闇」は拭えない。

「.....」

夜明け

復讐は失敗した。奴はもういない。

あれから、2時間程高宇はここで倒れていた。

既に夜は明け、眩しすぎる朝日と雨の臭いを彼の目と鼻を刺激した。

「・・・・・・・・・・・・・ったく。なにやってんだか」

はは、と彼は笑う。

「・・・・・・・・・・・・・黒夜・・・・・・・・・・・・・どうしてんのかな」

その場で転げ回り、嘲笑する高宇。

彼の体は水に濡らされてゆく。

「……」

「どついたらいいんだよね……くそつたねえ……」

無力さ。自分の持てる憎しみを全てぶつけても、彼には届かなかった。

すべては八方にはじかれ、それどころか自分にも突き刺さったあの言葉。

（今のオマエも、今の俺と同じ立場だってことをオオ！分かったのかよオオオー！！）

「……………」

ムクリと。彼は立ち上がり、その場を後にした。

朝の大通りは恐ろしいほど静かだった。

商店街も一つも店は開いておらず、灯りもポツリポツリと付いて
いるだけだ。

彼が路地裏にさしかかろうとした時。

ドン、と。何かにぶつかった。

「「・・・アッ・・・」

ぶつかつた相手は尻餅をついたらしく、イツツ、と声を出して
いる。

朝日によって、容姿があらわになる。

そのうち、

「
・
・
・
・
・
妹達？
」

殺していた自分の姿を思い出す。

(出来損ないの乱造品)

俺が言ったのか？

(人形遊びって本当に楽しいよね)

俺が言ってるのか？

オレハホントウニナニヲシテイタノカワカラナインダ。

オレハナニモヤツテナイ。オレノセイジャナイ。

【じゃあ誰のせい？】

ワカラナイ。

【あなたのせい？】

シラナイ。ボクハシラナイ。

【じゃあ誰のせい？】

ダレノセイナシナダ。

【ういせ】

おまえのせいだ。昭一

父さん？

鴉（後書き）

ちよつと手抜きですがこれでキリがいいはず W W

目に映るのはあまり高くない天井。

ましてや極端に白い天井。

「具合はどうかね？少年」

突然、視野の外から声がした。

ジロリと声のする方に目を向ける。

白衣の医者だった。それにカエルによく似た。

「まったく。丸14日も眠り込むなんて、もう死んだかと思つたよ？病院についたときは全身びしょ濡れで、口内裂傷、鼓膜破損。いったいどんな喧嘩をしたらああなるんだい？」

やれやれ、という感じで淡々としゃべるカエル顔の医者。

それを横目に、ふと耳元の棚に鏡があつたので目を向ける。

確かに。口元をガーゼで押さえており、両耳・額・後頭部を通る形でグルリと包帯が巻かれていた。

「俺は自分でここに来た覚えはないよ」

「そりゃそうさ。ある女性が運んできてくれたんだからね。名前は……言っていなかったな。キレイな人だったよ？」

「茶髪に中学生くらいの年の奴じゃなかったか？」

「茶髪は合っているが『中学生』ほど小さくはなかったよ」

高宇は首を傾げる。

運んでくれたのは妹達シスターズじゃないのか？

どちらにせよ気味の悪い話だ。

こつちが一方的に殺してきた側なのに助けられるなんて世界の七不思議に等しい。

「まあ。次会ったら礼を言っておいた方がいいと思うよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

複雑な心境だった。

礼を言えばいいのか謝ればいいのかどっちか分からない。

礼を言う? 今まで俺にそんな概念があったか?

謝る? 何に? なんのために? 誰のために? 理由が分からない。

（俺はどうかしちゃったみたいだ。やけに落ち着いてるっていうか。数日前まで人殺しをしてたっていうのに）

「少年！少年！大丈夫かね？！」

「……………っえ？ああ……………」

（ダメだ。なんなんだ俺は。どうしたんだ……………）

まるで『自分』が一人が消えてしまったみたいだ。

「全く。最近困った子供が多いね。君と同じように耳から血を流して病院に来た子もいれば、なんと右腕がぶつちぎれて病院に運ばれてきた子もいたよ。全く本当に……ぺらぺら」

「……………耳から血を流してここにきた奴。まだいるか？」

「いや。もう退院したよ。世話を焼かせる子だったね。君が眠っている間に退院して、また来たと思えば脳に損傷を受けてここに来たんだ。全く分げがわか……」

「そいつの名前！なんていう名だ！」

「アクセラレータ一方通行だけど。お知り合い？」

あくせられた。だれだっけ。

するべきだった。

彼はまもなく退院した。

(アクセラレータ、結局いくらきばっても思い出せなかったな)

2週間程前まで人殺しをしていたことは覚えているが、

その人殺しを、誰が止めたのか分からない。

局所的な記憶障害だった。

過剰なストレスからなのか、膨大な精神的ショックなのか。

あるいはそれ以外の何かなのか。

(あの時の感覚・・・もう一人の俺？・・・まさかな・・・)

拭うことが出来ない絶対の違和感。

裏の自分。

行き先もなく、誘われるかのように商店街に来ていた。

夕暮れどき。やはり人は少なかった。

ガラガラ、とシャッターを閉める音が鳴り響く。

路地裏にさしかかろうとしたその瞬間。

後ろから声がした。

「あのー……。もしかしてここで倒れた人ですか？」

ピタリと足が止まる。

振り向くと、そこには少女……。ともいうべきか女性ともい
うべきか。

整った顔立ちに少し長めのブラウンヘア。背丈はさほど変わら
ず、3cm程小さかった。

見覚えのある顔。
妹達。シスターズ。

「・・・・・・・・」

「あの大丈夫ですか？また病院まで運ぶのは嫌ですよ？」

少女は無邪気に笑いながら話しかけてくる。

「だけど。だけれども。」

「オマエは」

「え？」

聞かなければならなかった。コレが自分の唯一の償いだから。

「オマエは何号だ？」

「……………」

急に黙り込む少女。だが、すぐに元の笑顔を取り戻し話し始めた。

「高宇 昭一さん？」

「……………ああ」

名前を知っていた。つまり……

「やはり。『絶対能力進化』に關与する人物はあなたと彼だけですから」

「彼？」

「アクセラレータ一方通行です。学園都市最強の超能力者^{レベル5}」

また出てきたアクセラレータという名前。

「それにしても。急に倒れ込んでしまうなんてビックリしましたよ。なにかブツブツ言い始めたら絶叫して・・・」

やはり笑っていた。

自分を殺し続けてきた人物を目の前にして笑っていた。

「なんでなんだ」

「え？・・・」

「オマエ達を殺し続けてきたのに、なんで俺にそんな笑顔を向けれるんだ」

「やはり。その発言から推測するとミサカ軍用クローンを用いたのですね」

「オマエ達の存在意義は？！人形！？生贄！？それとも・・・」

「高宇さん」

遮るように彼女は語りかける。

「私はあなたが殺し続けてきた軍用クローンではありません」

「・・・？」

「私の検体番号は第0000号です。この実験の番外個体ですよ」
シリアルナンバー

「……………どういう……………」

「『絶対能力進化』レベル6シフトに用いられる軍用クローンの暴走を止める働きをする、『ミサカネットワーク』を統括制御できる上位個体が存在します。それを『打ち止め』ラストオーダーと研究者達は呼んでいます。私はその真逆」

少女は自分の頭を人差し指で指差した。

「ミサカネットワークから遮断された孤立個体。誰からの信号も受けない。研究者達は『孤立個体』フルチューニングと呼んでいました」

彼女は皮肉げに笑いながら、

「つまり、私は運良く実験のデータを送り込まれなかったということです」

運良く。

その言葉が高宇の心を大きく抉った。

「あなたは悲しんでいる」

深く、心臓に手を突っ込まれたかのような感覚。

「目で分かります。この実験でたくさんクローンを殺害したことを。決してそれは良い事ではありません。でもね」

優しくもあり、厳しくもある。

「あなた一人の責任じゃない。あなた一人が抱え込む必要はないんですよ」

「……………」

ガクリ、と。高宇はその場で崩れ落ちた。

「俺は……………オマエ達に何を言えばいい？この俺が出来るこ」

とはなんなんだ・・・」

ポタリと、地面に滴が落ちる。

「俺が殺してきた一万人の妹達シスターズに何て言えば・・・」

「もし、あなたに出来るならば・・・」

彼女はにこり、と笑いながら、

「死ぬまで精一杯生きる。そして笑う。それだけなんじゃないですか？」

「そうか・・・そうか・・・」

気づくともう夜だった。ただ決して暗くはなかった。

すすぶるきこたは？（後書き）

ちよつと無理やりかな？><

電波時計

高宇とフルチューニング孤立個体は、近くの公園のベンチに座っていた。

シン……と静寂の音が聞こえる。

風になびかれ、むなしく揺れるブランコが恐ろしく見えた。

「ところで、」

最初に口を開いたのは高宇だった。

「シスターズ妹達と違って、あの変わった口癖はないのか？」

「ミサカはあの子達ほど雑にテストメント学習装置で教育されてませんからね。なんとたつて『一番最初』に作られたモデルですから。まあ、張り切って精密に作られたワケですからちよ〜っと大きくなっちゃいましたけどね」

立ち上がり、自分のいろいろな所の大きさをアピールし始めるフル立チューニング个体。

「テストメント？なんなんだそれ」

フルチューニング
孤立個体は、『突っ込むところはそこかよ』という表情でむすつ
としたあと、そつと座り直して質問に応える。

「学習装置のことです。お姉様オリジナルの14歳までの頭脳を短時間で入手するにはこの方法しかないんです。時間は短縮できますが、ある程度の知識を覚えられても大事なことを覚えられなかったりするわけです」

「なるほど・・・」

大事なこと。世界の価値観や自分の存在意義、感情表現。彼女達

にはいろいろなものが足りなかったハズだ。

「もう一つあるんだが、どうしてオマエは『ミサカネットワーク』とやらに参加できないんだ？」

「ミサカにも分からないんです。微弱な電磁波を利用するはずなんです。途中にノイズが走ってしまっ……。まあこれもミサカの名前の由来なのでしょうね」

どこか寂しげな彼女を見て、高宇は提案する。

「『ラストオーダー打ち止め』とやらに会ったらどうにかならないのか？ボスみたいなものなんだろう？」

「それが出来ればとっくにしています。今彼女はどこかの研究所の培養液の中で眠っているはずですから」

「未完成だったのか？」

「あくまで『停止ボタン』の役割ですから。それに『ミサカネットワーク』に参加出来たとしても、意思表示が出来てもその位置情報は特定不可能なので」

「ややこしいネットワークだな、と高宇は思った。」

それにしても学園都市はものすごいものを開発したものだ。

電気を操れる能力者同士なら、携帯がなくても会話ができてしま
うわけなのだから。

「精密に検査されてるぐらいだから、本家並みの力を持ってたり
するのか？」

「とんでもない！ミサカが操れるのは大能力者^{レベル4}程度です。やはり
肉体の複写はできても脳内の『バーソナルリアリティ自分だけの現実』の複写は出来ない
ってことですね」

高宇はオリジナルが誰かということは知っていた。

御坂美琴。学園都市にいる7人の超能力者^{レベル5}の内、第三位に位置する人物。

自分よりも順位が上の人物。

別名
超電磁砲^{レールガン}。

当然、合ったことはないのだが。

「お、や、まじこんな時間ですね」

が、辺りを見回しても時計など見当たらない。

「時計なんてあったっけ？ここ」

彼女はニコリ、と笑うと無邪気にこう言った。

「エレクトロマスター発電系能力者の特権ですよ。電波時計は」

B y e f o r n o w

「オマエはこれからどうするつもりなんだ？」

「いつも通り学園都市を放浪します。研究所にも戻る気はないですし。強いて言うなら・・・」

彼女は自分の服をつまむと、

「新しい服が欲しいです。それとゲコ太ストラップ」

今思えば、彼女は白いワンピースの上に、茶色のふわふわしたジャケットを前を開けて着ており、足はまたも茶色のブーツを履くという『森ガールのな』服装だった。

「茶色好きだな」

「偶然ですよ」

あはは、と。久しぶりに笑えあえたような気がした。

あの時の笑顔とは違う。

「じゃあな。
フルチューニング
孤立個体」

「はい。さようなら高宇さん」

ニコリ、と彼女は笑う。

小さく手を振ってから彼女は公園を後にする。

「なあ」

呼び止められ、ピタリと足を止め振り返るフルチューニング孤立個体。

「ホント。ありがとうな。助けてくれて」

「いえいえ。ミサカもあなたに助けられました」

え？と思っているともう彼女は公園を出ていた。

一応、高宇にも住む場所は有るわけだ。

それは研究社達が寄付した2階建てのアパートだ。

まあ、売り手のない売物件を安く買っただけなのだが。

彼はその『アパート』に向かっていた。

ハズだった。

彼は思わず目頭を押さえる。

「ヤッパリな……」

玄関の入口に、『閉鎖宅』という張り紙が貼られていたのだ。

当然、ドアを開けようにも不法侵入になるので入るワケにはいかない。

結局高宇は公園で野宿することに決めた。

嫌に寒い夜。空に浮かぶ月は、
なにかを呼んでいるかのように見
える。

薄暗い路地裏。彼はそこを通り商店街を出ようとした。

しかし、それはできなかった。なぜなら、

「うわあああああああー!!」

背後から、男の叫び声があった。

高宇はチラリと後ろを黙視する。

手には金属製のバットを持っており、今にも降り下ろそうとして
いる。

パチン、と。軽く指を鳴らす。

その『音』の振動数は彼によって変更、収束され、その膨大な振動、振幅数により対象物を破壊する。

ハズだった。

あるうことか金属バットが彼の側頭部を直撃した。

ゴツ！と、鈍い音が路地裏に響きわたる。

高宇は1m程飛ばされ、壁際にあつたゴミ捨てばに倒れ込む。

(バカな・・・能力が・・・)

朦朧とする意識の中、頭をさすると手には血が付いていた。

高宇は動揺する。

「しねええええええええええ！」

見上げると、とどめのバットを振りおろそうとしている男を捉えた。

が、高宇はその『声』の周波数を変化させ、男の鼓膜の破壊を試みた

またも効果無しだった。

彼は驚異の瞬発力で横に転がりバットの一撃をかわす。

ガサアア！と、バットがゴミ袋を叩く音が響く。

彼が能力に頼りきり努力を怠っていれば、今頃彼は血達磨にされていただろう。

「しぶとい奴だ……」

「ハア……はあ……ちい……」

能力が発動しない以上、自分の体術だけが頼りだった。

（動けよ……俺えええええ！）

風のように彼は男の懐に入り込む。

男の頭を抱え、顔面に右の膝蹴りを叩き込む。

ガツウ！！と鼻の折れる音がした。

「…………ぐああああアアアアア！！？」

思わずバットを手放し、後ろによろめく。

鼻を押さえる隙を与えない。高宇は蹴りを放った右足を一步踏み出し、相手のつま先を砕いた。

そしてとどめ。

高宇の左正拳が男の鳩尾に突き刺さった。

「……………っが……………」

ドスン、と男は重量を感じさせるように倒れた。

「・・・・・・・・」

高宇もズルズルと背中を壁でこすり座り込む。

（この出血を・・・・・・・・どうにかしないと・・・・・・・・）

彼は男の方へより、背負っていたバツクの中をあさる。

（包帯があればいいんだが・・・・・・・・）

しかし。

カチャリ、と。こめかみに何かが突きつけられる。

拳銃だった。

「これで終わったと思うなよ・・・」

【おら】

誰かに呼ばれた。

【このままじゃオマエ死ぬぞ？】

自分の声。

【俺に身をまかせろよ。そうしたら助かる】

「バカな……。俺の声？」

【そう。オマエは俺。ただし、オマエの『現実』そのものだけど

ね】

「どひひひひとだ」

【オマエは俺を見続けてきたんだ。同じく、俺もオマエをずっと見てきたんだ。生まれた時から】

「俺はオマエなんか知らない。オマエは一体誰だ」

【分かっていないはずだ。俺達は一心同体なんだ。二人で一つなんだから】

「二人で……ひとつ……」

【そうさ。神は人を造り、その中にある『陰』と『陽』という器に半分に割ったココロを一つずつ入れたんだ。その二つのココロは決して混ざることはない。なにがあっても】

「コロロ？もう一つのコロロ？もう一人の、俺？」

【そうさ。オマエが『陰』、俺が『陽』。二つで一つさ。さあ、はじめようか】

「闇」が弾けた瞬間だった。

神の行方

(自慢の能力はどうしたってんだよ！なんだこいつ・・・メチヤクチャよええじゃねえか)

男の名は、
白河しらかわ
建蔵たつぞう。

『レベル6ソフト絶対能力進化』
に関する研究者だった。

そう。『だった』
のだ。

この『実験』の責任者と、
『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の管理者として、
優位な立場にあった白河。

彼はうかれていた。権力のおかげで金が手に入った。女もできた。

だっていうのに。彼は思いもしなかっただろう。

突如、何者かによって、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が破壊され、何者かによってこの『実験』が永久凍結されたのだ。

結果。彼は、研究所からも、上層部からも、女からも金からも権力からも見放された。

乱れに乱れたこの憎悪の鋒は、

よりによつて、第六位の高宇 昭一に向けられたのだ。

(オマエは俺から全て奪いやがったんだ。今度は俺が……俺が
ああああああ！！)

カチリ、と引き金を引いた。

た。
バアアン！！、と。無情にも、路地裏に爆せる衝撃が響きわたった。

但し、拳銃が放たれた音ではない。

突然、拳銃が内部から爆発したのだ。

火薬が誘爆し、大量の破片が、白河の右掌と右頬を貫いた。

グチュー！ジュブ！と、肉を抉る音が当たりに散らばる。

「ッ~~~~~アッアあああ……！」

その場でうずくまり、悶え苦しむ白河の耳になにかが聞こえた。

人の声。

「.....あはは」

ハッと、上を見上げると、そこには。

これが白河の最後の言葉だった。

「化け物め」

悲しみは消えることなく

【君は神の存在を認めるか？】

だ)
(神なんていないさ。この世の『人間』が生み出した悲しい彫像

【もし、神がいるとしたら、君は何を願う？】

深い闇の中、誰かが質問する。

（一つにしてほしい。憎しみを、悲しみを、怒りを。他のモノにぶつからないように）

【君のその『願い』の真意は？本当にそう思っているのか？】

（オマエは俺のハズだろ？だったら聞かなくてもわかるんじゃないかな）

【いや、分からないさ。君の『心』のしきりは誰にも外すことはできないからね。そう、神でさえも。君の願いが覗けないから、神は人に不平等を与える。人が神に唯一近づくには願うしかないのさ】

闇の中に、一時と静寂が響く。

か……？
（……オマエは神様なのか？それとも……悪魔なの

誰かが、クスリ、と笑う。

【俺は『ヒト』だよ。神でも悪魔でもない。君に仕切られた『心』の住人だ。神がもし、君の心の仕切りを取り除いてくれば、ゆっくり話をしようよ】

）．．．．．神は実在するのか？
（

【あゝ。せむぢらるゝや】

唐突に目が覚める。視界には、一度見たことのある白いくて低い天井。

また病院にいた。

(..... 夢 なのか)

もう一人の自分。裏の自分。

それは違いかもしれない。もしかしたら、自分がその『裏』なの
かもしれない。

アイツは一体何者なんだろう。

俺は一体、何者なんだろう。

「高宇さん。高宇さん。」

非常に大きな声で、ハッと我に帰る。

ふと横を見ると、何故かフルコミュニケーション孤立個体が居た。

「……………なにしてんだ。こんなところだ」

彼女はムツと顔をしかめると、

「それはこっちの台詞ですよ。あなたは『あの』路地裏になにか
「縁でもあるんですか？結局ミサカが運ぶ羽目になってしまって……
もつ」

鼻の先につきそうな程顔を近づけて熱弁してくるフルチューニング孤立個体。

髪から流れてくる甘い香りは、彼の鼻を浅く刺激する。

「また俺はそこで倒れていたのか？」

ん？と高宇は何かを思いつく。

「オマエこそ、なんでまた『あの』路地裏にきたんだよ。オマエ

もあそこになんかいい思い出でもあるのか？」

その質問を聞くと、何故か顔を赤らめてあたふたするフルチューニング孤立個体。

「あ・・・私は・・・アレですよ！アレ！アレのせいで私はあそこに・・・って何聞いてるんですか！！！恥ずかしいじゃないですか！！！」

どうやら彼女には、動揺すると極端になれっ呂律が回らなくなり一人称が『私』になってしまう特性があるようだ。

そんなことはさておいて、女に鈍感な彼は、眉を潜めて首を傾げまくっている。

こんな時に順番があるのは、やっぱり『最強の男』なのだろうか。

神と人についての論考。

小説本文

神は人を創った。

その最初に創られた人間が「アダム (Adam)」と呼ばれている。

その人間の最初の妻。それがリリス。^{Lilith}

そして、^{Adam}アダムの肋骨から生み出された生物。それがイヴ。^{Eve}

アダムとは土。すなわち、大地を意味する。

イヴとは生命。すなわち、大樹を意味する。

リリスは月を象徴する。

そして、アダムとリリスの子。それが悪魔。リル＝インだ。

人間、大地、樹、月、悪魔。

神はもう一つ、新たにモノを創った。

太陽だ。

神は太陽の象徴、ヘーリオスを創り出し、この世の秩序と神羅万象を生み出した。

一見、負と正のバランスが保たれているように感じる神の産物だが、

ちて問題。

神は唯一、創りそこねたモノがある。それはなにか。

【神は……一体何をつくりそこねたんだ。俺達「ヒト」では、到底たどり着くことができない神の思想。世界の万物は、一体何処へ行き着くというのか。ヒトの生と死。それさえも神は知っているのか？】

人間は、最も神に近い存在。

それでさえも、人間は神にたどり着くことはできない。

もし、神と等しい力を手にしたものがいるとするならば、

【・・・・・・・・行き先は神の思いがままに】

彼は、『闇』から見ている。

『神』と同じ場所で。

原点

これもまた運命なのだろうか。それとも偶然なのだろうか。

高宇とフルチューニング孤立個体は肩を揃えて昼の校区内を散歩していた。

「ホントにあなたは何もしていないのですね？」

彼女が質問していたのは、高宇が倒れていた現場で起こった事件のことだ。

「被害者は元『絶対能力進化』レベル0ソフトに深く関わっていた人物だそうです。遺体の状態が酷すぎて身元が分からないそうですが……」

「その話はもう何度も聞いた。てかなに刑事ぶってんの？」

ハッと、鼻で笑う高宇とは裏腹に、

「ミサカは真剣に聞いているんですよ！」

彼女の目は真剣そのものだった。まるで自分の息子の身を心配するかのごとく。

「本当だ。俺は何もやっていない。襲いかかられたりはしたが、相手が勝手に倒れた」

嘘だった。

あの男を殺したのは、正真正銘自分だった。

自分ではない自分。自分の中の自分そのもの。

こんな夢ごとを彼女に話したところで信じてもらえないのは分かっていた。

別に逃げているワケじゃない。何度も自分に問いかけたのだから。

「気を失っている間に何があったかは知らないがな。警備員アンチスキルの連中にも納得してもらえたしな」

ふと気がつくとき、横にいるはずの彼女がいなかった。

ギョッと、辺りを見回すと、

フルチューニング
孤立個体が、透明なショーケースにへばりついていた。

なかには、『巨大ゲコ太人形：大特価！！』とチラシがぶら下げられており、尋常じゃない大きさのカエルの人形がガラスの中に君臨していた。

(・・・なんなんだアイツ・・・)

思わずポカーンとしてみると、後ろから声をかけられた。

「高宇様ですね？」

チラリと後ろに目をやる。

そこには二人の黒づくめが立っていた。

「なんだよ」

「今回の件について、統括理事長がお呼びです」

「……………」

「早急にこちらにお戻りくださいとのリクエストです」

臭いがする。明らかに隠しきれていない『闇』の臭いが。

「時間をくれ」

高宇は、今だにショーケースに心を奪われているフルチューニング孤立個体のポケットに一枚のメモ用紙を滑り込ませる。

彼女には声をかけることなく、高宇は黒づくめの方に戻ってきた。

「よろしいのですね」

「ああ」

「では行きましようか。総史郎さん」

「え？」

そこから、彼の意識は遠のいていった。

*

「よく来たな」

「久しぶりだな。アレイスター」

周りには、眩いほど光に包まれた部屋。

それは照明の光ではなく、数万にも及ぶ機械類から発せられる光だ。

足元には、それらの機械類から伸びる無数のコードやケーブル。

さらにそのコードやケーブルは、地を這い、這い続けた結果、

中央の巨大なピーカーに接続されていた。

その直径4M、全長約10M程のピーカーには淡く赤色に発行す

る液体が入っており、

その中には『ヒト』が逆さまになって浮かんでいた。

その『ヒト』は、銀色の髪を持ち、あらゆる『人間』の可能性を秘めた外見だった。

男にも女にも見え、天使にも凶人にも見える。

その『ヒト』が、高宇に会話を求めてきた。

「そちらの実験は順調なのか？」

重く、軽やかな。矛盾した口調で高宇に話しかける。

「ああ。すぐぶる順調だよ」

この高宇は、高宇ではない。彼が持ちうるかもしれないもう一つの可能性そのものだ。

ましてやそれは、『ヒト』ですらないのかもしれない。

「それにしても……」

高宇はキョロキョロと辺りを見回したあと、うすら笑いしながらアレキスターに喋りかける。

「なかなかシユールな光景だね。さすが、彼に似たところもあるか」

「あの男とは一緒にするな。既にあの男はこの世にはいない。死者に興味はない」

「硬いねえ。研究者は。いや、『実』を食べた、できそこないの『ヒト』ってどこかな」

「こちらの要件を伺ってもらってもいいか？貴様の戯言を聞いている余裕はない。こちらもちらで、『実験』をクリアしないとけないからな」

「いいだろう。こちらも『陰』が帰ってくるのも時間の問題だからね」

アレイスターは、チラリと目を横ににやる。

すると、高宇の目の前に大きなウィンドウが表示された。

「これが私の『実験』だ」

「こりやまた……。神様が怒るよ。きつと」

「ベクトル変換器とAIM拡散力場を利用した人工天使だ」

「とうぜん、この人間は『実』と『葉』を手にしているんだよね
「？」

シン……………と、部屋に静寂が響く。

アレイスターはニヤリと口元を歪ませ、

「この人間こそが『実』だ。私の要件の内容は、もう分かっているな？」

「全ては神の仰せのままに」

そして、彼はこの場を後にした。

（お前も薄々感じているだろう総史郎。私達は待ちすぎた。神の祭壇に上がるのはイヴか。それともリルか。私は見届けるぞ。貴様が消えるまで）

また別れて

気がつく和高字がいなかった。

気がついたのはあれから一時間後ぐらいだろうか。

(ナントカしなきゃ・・・この癖・・・)

オリジナルから授かった悲しい運命。さだめ

一度あのカエルを見てしまうと一時間以上は見とれてしまつとい
うトンデモ癖だ。

(また・・・高宇さんとはぐれちゃったなあ・・・)

ぐしぐしと、みつともなく泣きじゃくるフルチューニング孤立個体は、ティッシュ
を取ろうとポケットに手を突っ込む。

すると、手がなにかに当たった。

取り出してみると、それはメモ用紙だった。

表に返すとそこには文字が書かれていた。

『この調子だと小一時間はへばりついてそうだな。気がついて俺
がいなかったらもう家に帰ったから。何度も迷惑かけて悪いな』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ホントダメですね・・・」

ハア、と。深くため息をしたあと、彼女は自分の『家』へと向かっていった。

*

彼女の『家』は、とある研究者の自宅だった。

全てがオプシヨン通りの『実に普通な』二階建ての家は、どこか寂しくもあり殺風景にも見える。

ただし彼女はそんなことは気にしていない。

なぜなら、自分が帰る『家』^{ホーム}なのだから。

しかし、問題点がたった一つ。

「帰りましたよママ」

彼女が『ママ』と呼ぶその人物は………

「お~~~~~つかえりいい！今日は早かったわねえ。
もしかして……フラれちゃったの？」

「ちょ……違いますよ！！っていうかい加減すぐ抱きつく
癖はやめてくださいよ」

玄関に一步入った瞬間、ドダダダダーー！と勢い良く孤立個フルチューニ
体に飛びつく一人の女性。

彼女の名は、ふじさき藤奇 れいか麗華。

『シスターズ妹達』の研究に関わっていたもと研究員だ。

彼女が生み出されてから、今まで彼女の『世話』をしているのがこの女性だ。

年齢の割りにはとても若く、優等生メガネにスラリとした長身に白衣を身に付けており、少し長めの黒髪ヘア！。

やはり長年世話をしている為もあるのか、フルチューニング孤立個体の髪形を藤奇自身が自分好みで調整しているらしい。

身長もさほど変わらないので、ハタから見れば親子のようなもの

なのかもしれない。

過保護すぎるのが唯一の欠点か、とフルチューニング孤立個体は思っ。

「それにしても……………」

藤寄はフルチューニング孤立個体の胸元をマジマジと見つめる。

「ホント大きくなったわね。いろんな意味で」

「ほっといてください!」

プイツとしかめっ面をして二階を上がって行ってしまった^{フルチューニ}孤立個^{ンダ}体。

「ふふ。カワイイわね」

ニコニコ・・・ともいうべきかニヤニヤともいうべきか。どちらにせよ無邪気な笑顔には変わりはない笑顔を浮かべる藤奇。

(ここまでアナタが育ってくれて嬉しいわ。高濃度の成長促進剤を使ったから寿命は16歳程度までかと言われていたけど・・・)

彼女はスタスタと二階の孤立個体フルチューニングの部屋の前に立つ。

(これでかれこれ一年と2ヶ月耳。この「はどじ」思ってるのかしら)

コンコン、と。軽くドアをノックする。

「ノンちゃん？入っていい？」

「どじどじー」

ガチャリとドアを開ける。

彼女は家の外見に似合わず、部屋の壁全体を薄いピンクの壁紙で

覆い尽くしていた。

そして、本棚や部屋の角に置かれているのは、

「なんでこんなにカエルが好きなのかしら」

「よくわからないけど好きなんです」

置かれているのは、ゲコ太、ゲコ太、ゲコ太人形だった。

せっかく綺麗なピンクでおおっているのに、これじゃ女子中学生
だと言わんばかりに雑な模様替えがされている彼女の部屋。

「そんなことより、最近、昭一クンの様子はどう？」

「出会った時と特に変わってませんが……あ！なんか事件起こしてました。冤罪ですけど」

「なかなかやんちゃなコなのね。あなたもそうというのが好みなの？」

「え？いやあ……………」

女心を突くのが巧うまいらしく、赤面して向こうを向いてる彼女を見て、藤寄は思わずわらってしまった。

(高宇……………か……………)

「ノンちゃん」

「はい」

「ちょっと出かけてくる。悪いけどご飯作つといて」

「分かりました」

「ん。よろしい」

ニコリと笑顔を向けると、藤奇は夕暮れの街を歩きだした。

目に見えるもの

「ここに人がくるのは今日で3人目だな」

「あなたにとっては嬉しいことじゃないの？アレイスター」

会話をしている二人。

学園都市のトップ。統括理事長：アレイスター。

もう一方は、『シスターズ妹達』の開発に関与する元女性研究者、藤寄。

「それにしても、変わったわね。アナタ」

「お互い様だ。そちらこそ、かなり落ちたものだ」

統括理事長、アレイスターは、全長10M程のビーカーの中に逆さまになって浮かんでいた。

体温、栄養バランス、心拍数、血圧、気体交換。体の機能を全て機械に身を任すという、恐怖すら感じるその威圧感。

「ふむ。やはりここに来るのは初めてだったか藤寄。ここに来た者は皆そういふ表情をする。機械ができることを、わざわざ人間がやる必要はないだろう」

「もはや瞬まばたきすらしないのが『人間』と呼べるのかしらね？」

「オマエの口からそのような言葉が漏れるようになったか。人形にでも情が移ったか？」

「あの子は人形じゃない。立派に生きてるのよ。アナタと違ってね。アナタも、一度助けられた身でしょう？もう人の気持ちすら読めなくなってしまったのね」

「現代の『人類』は自ら破滅の道を組み立てている。私が信じられるのはもはや何も無い」

その『ヒト』の目は、その気になれば睨むだけで人を殺せるかもしれない。

全てが科学に浸かった体。人間の墮落した『知恵』。

「ふむ。オマエの要件はそれだけではあるまいな。こちらも忙しいのだ」

「高宇 昭一。アナタはあの子をどうするつもり？」

ピシ……ピシ……と。機会が漏らす音が部屋に乱反射する。

「あの男は立派な『器』となった。彼の目的はほぼ達成されたに近い」

「誰もあいつの実験のことなんて聞いてないわ。目的が完全に終結を迎えれば、彼はどうなってしまうの？」

「それをお前に答える筋合いない。聞きたければ、彼自信から聞くんだな」

ハア・・・と、深くため息をつく藤奇。

そして、こう要求した。

「彼を、うちで預かれないかしら」

「ふむ。時が来れば。お前がどうなるか分からないぞ?」

「結構よ。私の命なんて」

*

彼は、一時間程度記憶が飛んでいた。

(あの黒ずくめ達・・・統括理事長・・・一体なにものなんだ。
俺は一体何をしていた)

夕暮れ時、彼は校区内のステーション付近を出歩いていた。

理由は単純明快。家がないからだ。

（それにしても……このトップの『絶対能力進化計画』の真意はなんだったんだ。ただ端に『絶対能力者^{レベル}』を作りたかっただけとは思えない……）

疑問が疑問を生む。真実だと思っていたことが、疑惑になる世界。

結局、人が選んだ道は「それ」だった。

いつからだろう。人が信じ合えなくなったのは。

いつからだろう。与えられた特権を、無駄使いするようになったのは。

いつからだろう。

神が人を造ったのは。

もう一人の自分。最も信じられない存在。裏の世界。嘘の塊。疑
惑の真実。

「もう一人の……俺がいる……としたら……」

と。唐突に背後に気配がした。

ハッと振り向く。そこには、

「はじめまして。いや、久しぶり、かしら。あなた高宇くんよね？」

「……………アンタ誰？」

「『シスターズ妹達』、と言えば分かるかしら？元被験者くん」

「その声……藤寄か」

声だけは聞いたことはあった。各2万種の実験の内、屋内で実施された100種程度の『アナウンス実験』の放送係をしていた人物だ。

「で、今更俺になんの用だ？実験は凍結されたって聞いたけど」
「あら。よく知ってるじゃない。既に情報はあのコから聴取済み
ってワケね」

「？」

「ところでさ。今から行く宛とかあるのかしら」

「わざとらしく聞くね。『閉鎖』したのはアンタだろ？」

「あちゃ。バレちゃった？」

「キツチリ張り紙に名前を書いてた奴なんだから、相当馬鹿な研究者なんだろうな」

ハハハ、と鼻で笑ってやる高宇。

何故か相手も苦笑いを浮かべて頭を掻いている。

だが、

(今の顔……どこかで……)

違和感があった。さっき会ったばかりなのに、やけに懐かしい感じ。

さておいて、話が急に始まった。

「で、実は用があつて君に合いにきたんだけど」

「なんだ」

「知りたいんでしょう？あの人達の正体。君が何をしていたか」

「……つな……」

的確、どころではない。

まるで自分の思考回路を覗き見された感覚。

「アンタ……」

「『サイコメトリー読心能力』よ。研究者に能力はタブーなの。この件はご内密に」

無邪気に顔の前で両手を合わせて祈願する藤奇。

「なんてこつた……」

「ま、そんなことより、ウチに来ない？」

「?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9339u/>

とあるもしもの一方通行

2011年11月23日17時51分発行